

虚構と現実の”Roger Malvin’s Burial”：方法の模索

井坂, 義雄

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化. 論文編 / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

8

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2007-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002985>

虚構と現実の“Roger Malvin’s Burial”

——方法の模索——

Pursuing “Roger Malvin’s Burial”

井坂義雄

(1) 一つの流れ

ダーウィンは『種の起原』の第二版の最後の文章に、初版にはなかった一つの表現を書き加えた。それは「造物主による」(by the Creator)という言葉である。¹⁾ 結果として、最後の文章は次のようになった。「生命はそのあまたの力とともに、最初わずかのものあるいはただ一個のものに、(造物主によって)吹きこまれたとするこの見かた、そして、この惑星が確固たる重力法則に従って回転するあいだに、かくも単純な発端からきわめて美しくきわめて驚嘆すべき無限の形態が生じ、いまも生じつつあるというこの見かたのなかには、壮大なものがある」²⁾

世界の創造は、旧約聖書の創世記に記されているとし、生命の起源は設計する造物主 (one grand Designing Mind)³⁾ にあるとするキリスト教神学と、仮説としてのダーウィンの進化論では、「壮大なもの」(grandeur) の中身は違って見えていたはずである。この違いは論争によって克服されたり、されないままであったりしてきたが、問題の

核心が消えたわけではなかった。

日常の生活も含めた実際の世界では、この問題が先鋭化することは少ない。科学と信仰という大ざっぱな枠組みで論じられることが少なくなってきたことと、あまりにも多くの変化と課題、あまりにも多くの事象が目の前に展開されてきたために、わずかに倫理の問題が、あたかも突発的に起こったかのように取り上げられるのみで、大勢は一方の側、すなわち進化論的世界観に組してしまっているように思われる。知的関心の広がりや深まりが知的生命体としての一人の人間に生じたときに、その人間は、いやがおうでも、知的総体としての一つの歴史の中に組み込まれていく。真摯に考えようとすればするほど、現在の客観性に疑問をいだき、より客観的に価値を求めようとすればするほど、ますます一つの方向に流れていってしまうという現実の状況がある。この流れから完全に離れることはできない。なぜなら、情報と呼ばれるものの流れ方は影響力において均質であり、流れるもの自体は個人の力では検証することが及ばないほど、すでに詳細に検討され、緻密な論考を重ねて蓄積されてきたものであり、説得されまいとしても、等価の代替物を知らないし、またそれを見つけ出すことができないかぎり、結局は説得されるからである。

べつの言い方をするならば、西欧化は既定の事実になっている。それは紹介から、受け入れ、同化という道をたどっている。我々はそれを認識することさえ忘れてしまっているように思われる。

(2) 作品への接近

いかにしてある特定の文芸作品に近づくか、あるいは近づいたかを検討することは、既定の事実としての西欧化を認識するための一つの有効な手段になる。まず手順として見なければならぬものは、読者

と研究者の個々人の履歴である。文学好きであったとか、たまたまある作品に巡り合ったとかが話の始まりになると考えられるが、そのような始まりは、個人の履歴を社会的環境にまで押し広げてみれば、一つの飛躍であることが分かるだろう。教育的環境の中で幼少のころから身近に置かれていた外国文学は、多くの大人の頭脳によって選びぬかれ、書棚に巧妙に並べられたものである。そこにはある情念が貫かれている。普遍的な人間性に対する信頼と、成長にともなう人間の向上が暗黙のうちに期待されている。これは啓蒙の情念といってもいいが、これがなければ何も始まらないという意味で教育的第一歩を踏み出している。過去に現われた悲惨で残酷な歴史は、のちのちに個人が成長して知ることになるだろう。まずは信頼することから始めなければならない。

教育的配慮によって幼少のころに書棚に置かれた外国文学がきっかけとなって、なにか大きく扉が開かれるというのは、かならずしも正しいとは言えない。外国文学は依然として遠くにあると言うべきである。作品を読む行為は、具体性をともなった事実行為である。そこで、作品への遠近を、外国文学という漠然とした表現ではなくて、ある特定の作品を取り上げることによって具体的に見ていくことにしたい。

ここで取り上げるのは、アメリカの作家、ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-1864) が書いた「ロジャー・マルヴィンの埋葬」(“Roger Malvin's Burial”) という短編である。この作品は、「ぼくの親戚、メイジャー・モリヌー」(“My Kinsman, Major Molineux”)、 「ヤング・グッドマン・ブラウン」(“Young Goodman Brown”) とともに、作者が大学を卒業したあとの1828年から1829年ころに書かれたと推定され、⁴⁾ 初期の短編のなかで高く評価されているものの一つである。そのあらすじは次のようになっている。

舞台は植民地時代のニューイングランド。インディアンとの戦闘で傷を負った二人の男、一人はロジャー・マルヴィンという老人、もう

一人はルービン・ボーン (Reuben Bourne) という若者、この二人が植民している定住地に帰ろうとしている。傷のために老人は先に進むことができない。死を覚悟した老人は、このままでは二人とも死んでしまうから自分を置いて帰るように、帰って婚約している自分の娘、ドーカス (Dorcus) と結婚するように、帰ったら娘に事実を話し、傷が治って元気になったら、ここにもどってきて自分を埋葬し、祈りの言葉をあげてほしい、と若者に訴える。若者はためらい、苦しんだが、老人の願いを聞き入れて、老人を置き去りにする。やがて若者は救援隊に助けられて辺境の定住地に帰ってくる。父のことを心配する老人の娘には、なんとかして老人を埋葬し、墓標を立てたと告げる。二人は結婚し、息子、サイラス (Cyrus) が生まれる。息子が立派に成長すると一家は奥地に新しい定住地を求めて出発する。老人を置き去りにしてから18年が過ぎていた。出発して五日目の夕方、家族は野営の準備をし、ドーカスが食事を作るあいだに、父と子は反対の方向に向かって周辺に獲物を捕りに出かける。茂みの中を歩きながら、埋葬しないまま置き去りにした老人の死骸が見つからないものかと願ったルービンは、なにか茂みの向こうに動くものを見て、銃を撃った。撃たれて横になっていたのは息子のサイラスだった。

(3) 作品が遠い理由

作者と作品に関する紹介と、あらすじが伝えられれば、読者はかなり作品に近づいたように思うかもしれない。そう思うのは、この作品と作品の作者に触れるに至った私の履歴をなにひとつ伝えていないことと関係している。作品は依然として遠い位置にある。それは二つの理由から説明できるだろう。まず一つは、作品の舞台となる場所と時代が、我々から遠く離れていることである。はるかに遠く離れている

場所であるとともに、はるかに昔のことである。世界が情報化され、航空機関の発達が移動時間を短縮しているとしても、相対的な遠近がなくなるわけではない。インディアンとの戦闘があったとされる歴史的事実は1725年であり、⁹⁾ 我々は江戸時代の中期にまで思いをはせなければならぬ。

もう一つの理由は作品のもつ性質によるものである。文芸作品は、さめた目で書かれた客観的記録ではなくて、虚構という恣意性を前提とした作り話なので、なんらかの媒体がないかぎりには伝わりにくい。ここには媒体の働く働き方、すなわち、ある特定の文芸作品が読者に伝わってくる過程も含まれる。ある特定の文芸作品が、なぜ読者に伝えられ、どのようにして読まれるようになったかが問題になる。なぜこの作品が読まれて、なぜあの作品が読まれなかったのかが問題になる。偶然性も含めた個々人の鑑賞力や趣味の問題は気難しい感性と感覚を押し量らなければならないので、まったくの手探りの状態では、作品への接近をますます困難にする。この二つの理由によって作品が読者から遠くなるのは、外国の文芸作品にかぎられたことではないだろう。

外国の文芸作品が遠い理由に、作品に使用されている言語がある。母国語ではない言語の理解は専門的な訓練を必要としているので、遠いところから近いところに移す作業は外国文学研究者が進めているが、その作業自体が、作品を遠くに押しやってしまう原因を作っている。耳慣れない固有名詞でさえも、読者を作品から遠ざける理由になる。外国文学研究者が作品を遠いところから近いところに移す作業の過程は、ちょうど先の二つの理由を合体したものからなっている。研究者は国別の文学史に長じており、作品の広がりや国の中に我知らず閉じこめてしまう。民族国家 (nation-state) の歴史が、わずか200年ほどしかないにもかかわらずである。言語の違いと国境によって区分される国別の文学史は、外国の文芸作品への接近を難しいものにして

いる。外国語という媒体があるので止むをえないと言えば、そうかもしれないと思ってしまうのだが、じかに作品に触れる機会は、概して失われる。

「ロジャー・マルヴィンの埋葬」という作品、およびその作者は、19世紀のアメリカ文学に分類され、これらを取り扱おうとする研究者には、ある特定の作家や作者を研究するという意味で、個人研究という分野が用意されている。個人研究は、対象とする作家なり作者なりの個人の性向が大きく前面に出てくることが多いので、作品の特異性や独自性は、当の作家なり作者なりの性向に閉じこめられ、閉じこめられたままで終わってしまうということが起こりうる。作品には、作者が意図しようと思つてまいと、それ以上のものがあるかもしれないということが問題なのである。それを見えなくするかもしれないのは、作品と作品の作者に関する知識の多寡による迂回である。

(4) 多様な概念

この作品について論考され、あるいは論考の主題として取り上げられているものは、きわめて多岐に及んでいる。論考の主題となるものは、作者の読書歴に始まって、歴史、聖書、神話、心理、文体等々、およそ思いつくあらゆる分野にわたっている。それがどのようなものであるかを、一つの研究案内書から、読み取れるままにひろって、簡条書式的に並べてみよう。⁶⁾

植民地の歴史、インディアンとの戦闘、英雄譚、命名と旧約聖書、コトン・マザーの説教、古代ローマとギリシャの祭式と埋葬、インディアンの迷信と民間伝承、罪滅ぼし、息子の父親への不服従、古代インドの『ラーマーヤナ』、子供から大人への移行、ピュー

リタン精神、主観的世界の創造、家 (home) の探求、親の探求、罪 [正邪] の意識、旅、森、隠匿の罪、良心、告白、さらし台、五月柱、カルヴァン神学、両面価値、愛国神話の作られる過程、息子を撃った理由、死者への祈り、意図的か偶然か、狩りをする人の本能、創作上の失敗、作者の意図、自家撞着の説明、ルービンの狂気、破壊的な妄想、父親殺し願望の転嫁、最愛のものの犠牲、幼児性の除去、復讐行為、悪魔のたくらみ、復讐の神、感情移入、死と生の交換、原罪、エディプスコンプレックス、自己犠牲、信仰の欠如、無意識、神意の働き、あがない、病理的、異端的、想像上の犯罪、心理学的解釈、非キリスト教徒的、アメリカ史の風刺的意味合い、神話化、アメリカの辺境、西部開拓のロマン化、西部神話を粉碎する風刺と嘲笑、隠喩としてのフロンティア、自己欺瞞によって隠されていた獲物、象徴としての檜の木と岩、上部と下方、呪い、墓石と祭壇、血の奉納、ルービンの受動性、外的事情、モダニズム、懐疑、強迫観念的、洞察力、説話の一貫性、深層心理、独創性、ルービンの苦境

選び出した語句は前後につながりがないし、文章に提示されている文字を問題の差異として整理をしないまま、ただ字面を追って書き出しただけである。書き出した語句そのものも、主題となりそうだと考えたものを文章の流れを切断して訳出しただけである。そのような条件を受け入れるとして、並んでいる文字を一覧すると、いかに研究者が多様な視点をもって作品に接近しているかが、おおまかにではあっても、理解できると思う。概念は重なっていることが多く、概念は互いに侵食し合っていると言ってもいい。ここにある小主題は、そのどれもが、他のすべての小主題の総体、および、一つ一つの小主題と隣

り合い、重なり合い、侵食し合っていると同時に、そのどの一つもが、作品全体を覆う大主題になる可能性を秘めている。

(5) 作品が近い理由

すでに見たように、概念が豊富な作品は、公的なもの、すなわち公式記録ではなくて、私的な想像の世界、あえて言えば幻想の世界である。公的なものから解放されるということは、歴史からも解放され、「線形順序」に左右されることもなくなり、「『時間の流れ』という暗黒の思い」に縛られることもなくなるだろう。⁷⁾ 幻想が力をもちうるのは、まさにそのようなときである。我々は自由に概念のあいだを往来することができるし、概念を考量し、打ち破り、越境することができる。それだからと言って作品を壊したことにはならないだろう。作品は自らの権威をもって存在し、その存在を少しでも疑われるようなことはないだろう。政治的な束縛を行使することがないので、国籍というものを持たない。したがって、また地理的な条件に縛られることもない。解き放たれて、なにか伝達の必要性が生じるまでは、頭脳と個人の生活空間にかぎられた私的営為であり、「書かれない法はすべて自然の法である」⁸⁾ という法則性の世界観から言えば、いわば自然法に守られている。

なにか既存のものについて注意がいく、あるいは関心が集まるときは、その起点は現在の生命である。どのような経緯で我々のところに届くようになったかということと、どのように届いたものに反応するかは別の問題である。作者の読書歴は読者の読書歴に対応するかもしれないし、作者が展開しているであろう世界は、読者の世界によって蹂躪されるかもしれない。ここには調停しようとする人はいない。喧騒はないだろうし、たとえ起こったとしても、痕跡らしい痕跡を残さないで消えていってしまうことだろう。しかし、喧騒ではない何かが

残る。それはたんなる印象にすぎないかもしれないし、伝達されるものとして記録されるかもしれない。そのときにこそ、それまで疎遠であるかもしれない作品は、読者に近いものであることが証明される。

解釈ではなくて、作品との出会いということから、作品と読者を接近させるかもしれない概念を、いくつか見てみよう。

〈その1 埋葬〉

埋葬はいたるところにある。死者を埋葬しないで放置しておくという事例があることを知れば、ルービンが老人を埋葬しないまま、18年間も放置していたことは、心理的な葛藤を越えている。死者をうやまうための礼節は、祈りの内容までも規定する。宗教と宗派の違いは日常の生活をも分断する。荒野でさえも埋葬できなかったというのは、荒野だからこそ埋葬できなかったという命題になりうる。都市化が進み、埋葬のための土地の確保が難しくなっていることは、死者をもつ経験のある家庭ならば知らないわけにはいかない。作者の叙述では、老人と若者が傷を負って休んだところ、老人が朽ちたところ、ルービンに銃に撃たれたサイラスが横たわったところは、巨大な墓石であることが示唆されている。自然葬は現在の我々には、耳慣れた言葉になっている。目的が研究であれば、地中から骨を掘り起こすことは生者の幸福にかなっている。死んで土に戻る〔帰る〕と知っていても、なお土とは区別したい、区別されて宇宙のどこかにとどまりたいという我々の情念は、消そうとしても消えない。

〈その2 家〉

出生の全貌を我々は知らないし、また知ろうとしても知ることはできない。そのために、出生を意識すると同時に家を意識する。親を出生の場として考えるのは、それなりに成長してからである。どのようにして家が成り立っているかは、同じように、のちになってからであ

るにちがいない。この作品では、戦闘から帰ろうとしているところが、「煙突の煙」によって、家庭であることが暗示されている。ルービンの住まいが荒野の中の開拓地であることが示されている。老人の娘ドーカスと結婚して作った一家を奥地に移すときの説明で、開拓地は、ほかにも住民はいるらしいが、それら住民らしき人びとは「巡礼者」となっている。開拓地は故郷にはなっていない。かぎりなく歴史をさかのぼって故郷を探すことはできないが、生活を安定させる一つの要因として故郷があることを、我々は経験的に知っている。どこが故郷であるかをつきとめようすることは、出生の秘密を知ろうとすることと同じように、あいまいさを残すことを前提としなければならないが、家が開拓地にあり、隣人が巡礼者となっているのは、あたかも故郷が隠されていて見えなくなっているように思われる。故郷は概念としては消えてしまっているのかもしれない。

〈その3 死者〉

ここに出てくる死者はサイラスだけである。ロジャー・マルヴィンは死んだはずであるからだが、死者として立ち現われることはない。ドーカスとルービンによる追想の焦点は、生者に見取られたかどうかについてであって、そのかぎりでは、ロジャー・マルヴィンは、まだ生者との接点をもっている。埋葬そのものが問題なのではなくて、尊厳ある死が求められるとおりに実現したかどうかである。ルービンを悩ましていると思われるものは、いわば死骸のない死者であって、これは習俗と習慣によっては亡霊という形象をとることになる。なぜ亡霊や魂にならないで、しかもなおルービンを苦しめるのだろうか。生者と死者のあいだには境界線があるはずなのに、ルービンは縁を断ち切ることができないのである。越えるべき境目を越えることができない。そのために死者はまるで亡くなってはいないかのように、生者に働きかけることができる。これもまた習俗と習慣によっては呪いとい

う形象を作り出すはずである。

なぜそのようにならないのだろうか。約束を約束どおりに実行しなかったことが、なぜ呪いとなってルービンを責めないのか。じっさいは呪いとなって責めているかもしれないのである。しかし作品では、呪いを外から及んできたものとして扱っていない。ルービンは世界を越えたところのものまでも自分の世界に引き入れようとしている。人と人との約束は義理、人情と同じように人の行為を制約する。たとえ見えない相手であっても、約束は解消されない。生と死は切り離されているはずなのに、現実には切り離されていない。仕切られているはずの境界線は、やすやすと乗り越えられて、持続的に問題を作り出している。

〈その4 戦闘〉

闘いの描写はなくて、歴史的イベントとして説明されている。闘いの原因となるものは語られていない。あまりにも自明であるかのように語られていないので、まるで、根も葉もないところに放り出されて闘ったかのようなのである。戦闘の相手は荒野であるはずはない。人の住まない寂しい場所という意味での荒野であるならば、戦闘の相手はいないはずである。したがってインディアンは戦闘の相手であると同時に荒野でもある。インディアンは開拓地の外にあって、野蛮なのである。荒野は未開拓の地であるのだから、いずれは開拓することが見込まれている。戦闘が肯定されるのは、このことと繋がっている。どのように戦闘を定義しようとも、銃を使うということではインディアンとの戦闘だけではありえない。銃を使うことは、なにかを排除することである。たとえ有用のためであっても、なにかが失われる。食肉となる獲物は銃砲の向こうに存在する。そして戦闘となると銃口の向こうにあるものは倒さなければならない。なぜなら、そこにあるものは親しいものではないし、ルービンは親しいと感じている世界の構成員では

ないからだ。たぶん、どんな生き物にも、あやまちはあるだろう。人間でなくともである。あやまちは、安定している境界線を乱し、たとえ一時的であれ混乱させる。その混乱を元にもどすとき、混乱によって消えた力のなにかがしかは、だれかが、なにかが、あるいは心が返さなければならぬだろう。それは胸が騒ぐことであるにちがいない。作品はその胸の騒ぎを用意している。

〈その5 約束〉

なにかを実行するかしないかについて文書に記しても、係争に至ることはある。書かれることは限定的で、信義を的確に文字にすることはできないかもしれない。生きるものとしての均質な共同体の中でも約束が裏切られることは、しばしば経験されることである。

状況が約束を実行することを困難にすることもある。ちょうど安全率を百パーセントにすることは人間には不可能であるのと同じように、約束が絶対に保障される状況というのはいない。約束の効果は小さいので、双方からであれ一方からであれ、破棄される可能性は高い。老人と若者の約束は生きているものの境界線内で行なわれたものだが、約束の履行は境界線を越えたところにある。死者と生者のあいだでは、履行するかしないかの判断は生者にのみ与えられ、死者は履行の有無にしたがって称賛することも、感謝することも、非難、叱責することもできない。死人は口をきかないという理由で、生きるもののみが作る均一の合理の世界から駆逐され、境界の向こうに追いやられる。信義の内容と理解は、二人のあいだに閉じこめられているので、記号化できない領域に広がって、こだわりとなり、消えることなく取り残される。死者は越境し、約束の履行を迫るという結果をもたらすことができる。ルービンはこうして息子の死という高価な支払いをしなければならなかった。約束は完全に記号化されないので、遠近にも左右されないし、生死の線にも妨げられることはない。

〈その6 荒野〉

なにか豊かな野を前提としなければ荒野は成り立たない。豊かな野は家であるかもしれないし、開拓地であるかもしれない。いずれにしても、荒野に対置されるものは人工物であるか、人工的に構築されたものである。二つを区別するところに辺境があるが、辺境そのものは時事性をもつという点で関心が集まりやすいけれども、恒久的ではないだけではなくて、つねに曖昧さをともなっている。辺境は主観的で一方的なので、どちらかといえば過渡期の現象としてとらえられるだろう。それは前進するか後退するかのどちらかである。辺境にともなう荒野はなくなる。したがって荒野にも行けないし、豊かな野にも住めなくなるときは、地上から離れなければならない。ルービンが老人のために祈らなければならないのは、そのためである。おそらく、人倫の道が開かれるのは、荒野を生きようとするときに発生する知恵の働きがあるからなのだ。荒野は人間以外の生き物と出会う場所でもある。野蛮を嫌うのが人間ならば、その野蛮と出会う場所が荒野である。負傷した二人が開拓地に辿りつかないので問題が起こった。そこは野獣の吠えるところ、人間的合理を許さない場所なのである。人間的合理の世界が広がるにつれて、なくなってしまうのではないかという幻想を人間に抱かせるような、つかみどころのない不可解な場所である。

〈その7 越境〉

いくつもの境があり、越えたり越えなかつたりする行動と視線の越境がある。交信があったかどうかは分からないが、生者と死者のあいだ、夫と妻、父と子という人間のあいだ、捕らわれの身からの逃亡、天国からの救い、自然と超自然、過去が現在に侵入すること、荒野へ入りこむこと等々。

他者を置くこと、他者は自分とは異質であること、したがって自分

と他者のあいだには境界が存在すること、これが越境の原点になる。越境を具体化することは自由と束縛の共存を意味し、ここから老人の説得とルービンの苦悩が始まる。複数の人間の生きる行為から倫理は導き出される。戦闘という破壊行為のあとの若者と老人の交渉は、習慣化し、固定されているものが不安定であることを示し、生存にまつわる営みに不快感をあたえている。越境は個人情報、連絡網、人権、交渉、決裂、侵入、援助、監視、強制、移住等の概念に付きまとい、我々を神経質にする。登場する人物が少ないことと、作者の語りの巧みさによって、荒涼としているはずの情景に、かえって多くの越境が用意されている。

(6) 概念の検証

文芸作品は独自の世界をもち、その世界は、読んで理解されるであろう共有可能な概念のうちに成り立っていると思われている。それは「人間」を共通基盤としているが、「人間」の概念は西洋文化によって現代に培われてきたものである。この概念の淵源は、西洋ルネッサンスに求めることができるであろうし、さらに古代ギリシャ・ローマにまで行き着くことは西欧の知性にとっては常識になっている。たとえば、新大陸アメリカに移住した人間が、ヨーロッパとは違ったアメリカ独自の文化を形成することになる要因を、アメリカのフロンティアにありとするターナーの発言は、分断と断絶を試みようとしながら、かえって人間と文化の連続性を明らかにしている。

「地中海がギリシャ人に対する関係、すなわちこの関係は、習慣の絆を断ち切り、新しい経験を提供し、新しい制度と活動を引き出しただけではなくて、さらにそれ以上のものであったのだが、地中海がギリシャ人に対する関係は、たえず後退する [向こうに退いていく] フ

ロンティアが、近くは合衆国に、遠くはヨーロッパ諸国に対する関係と同じであり続けてきた」⁹⁾

このような人間と文化の連続性に異議をとなえるのも、また西欧の知性である。「連続の原理」、すなわち「進化という通俗概念」¹⁰⁾を打破すべきだとするヒュームは、人間の基準を次のように断定する。

「彼ら〔哲学者たち〕は満足という或る意識せられない基準に動かされているのである。

……ヒューマンイズムの諸基準は、思うに、明らかにまがいものである。しかし、この基準の、まがいものであることを、これらのひとびとにわからせることは困難である。なにしろ彼らは、そもそもそういう基準のあることを、まだ認めるに至っていないからである」¹¹⁾

西欧化を認識するための有効な手段としてホーソーン の作品を取り上げたのは、外国の文芸作品が、漠然とした文化と呼ばれるものの障壁に接近を阻まれていると考えるからである。世界を覆いつくしつつある西欧の知性は、また変化もしている。「人間中心の生命の見方を特権的な地位から引きずり下ろすことを目指すべきである」¹²⁾ という主張がなされるようになるほど、西欧の知性は洗練されている。このような変化は人間とか、生命という概念にとどまらない。我々にとって基本的な概念の一つであるはずの「正義」について、西欧の知性は同じような認識を示している。

「正義と正しい秩序の理想を表現しようという気持になるのは、ごく最近までは、西欧固有の性癖だった。したがって我々は、正しい社会秩序というものをまったく違った方法で作りを上げることを選んだ文明に対して、あるいは、まったく違った方法でという点で言えば、権利中心の道徳理論とは異質であったと思われる西欧の遠い過去に、我々のもつ権利中心の見方を当てはめようとすることはやめたほうがいいだろう」¹³⁾

文化と呼ばれるものの障壁は、地理と歴史に負うところが大きい。地

理と歴史に拘泥するかぎり、我々は障壁を乗り越えることはできない。乗り越えなくてもいいという立場があることを十分に承知したうえで、別の立場を設定することは、方法論としては許されるだろう。それは虚構を幻想としてとらえ、そこから現実を引き出すという立場である。ここには西欧の諸基準を検証するという過程が介在する。この立場は、世界観の選択によって支えられるだろう。この立場は、目の前にある現実がすべてではないという認識をもつと同時に、知性は選択するという原則を自己の基盤とする。そして、これもまた西欧の知性が、まったく逆の方向から言い当てていることである。

「世界を一つのメカニズムと見る見方は、実在そのものの本質ではなく、知性の或る選択にもとづいたものである。知性は、事実、実在を歪曲する。知性が歪曲するというのは、ものを説明するにあたって、それがつねに執拗にものを部分部分に解きほぐそう、すなわち、分析しようとするというこの理由によるのである」¹⁴⁾

現在の客観性に根拠をあたえようとすれば、知性の積極的な選択はあっていいはずであるし、外国という概念がつきまとうのであれば、なおのこと、その必要性は高くなる。

注

- 1) Cf. Frank X. Ryan (ed.), *Darwinism and Theology in America: 1850-1930*, vol.1 (Bristol, England: Thoemmes Press, 2002), p. vii .
- 2) 八杉竜一訳『種の起原（下）』（岩波文庫）岩波書店、昭和46年、222、276頁。 There is grandeur in this view of life, with its several powers, having been originally breathed by the Creator into a few forms or into one; and that whilst this planet has gone cycling on according to the fixed law of gravity, from so simple a beginning endless forms most beautiful and most wonderful have been, and are being, evolved. —Charles Darwin, *The Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favored Races in the Struggle for Life and The Descent of Man and Selection in Relation to Sex* (The Modern Library), New York: Random House, p.374. この書にはなぜか出版年が記されていない。
- 3) James McCosh, "Darwin's Descent of Man" *Darwinism and Theology in America: 1850-1930*, vol.1, p.2. 現代におけるキリスト教信仰と進化論の関係については、次の書を参照されたい。Michael Ruse *Can a Darwinian Be a Christian?: The Relationship between Science and Religion*, Cambridge Univ. Press, 2004.
- 4) Cf. Elizabeth Lathrop Chandler, *A Study of the Sources of the Tales and Romances Written by Nathaniel Hawthorne before 1853* (Folcroft, Pa: The Folcroft Press, Inc., Reprinted 1969), pp.55-56.
- 5) Cf. Robert L. Gale, *A Nathaniel Hawthorne Encyclopedia* (New York: Greenwood Press, 1991), pp.427-428.
- 6) Lea Bertani Vozar Newman, *A Reader's Guide to the Short Stories of Nathaniel Hawthorne* (Boston, Mass: G.K.Hall, 1979), pp.271-282.
- 7) 大森莊蔵『時は流れず』青土社、1996年、77 - 102頁。
- 8) ホップズ著、水田洋訳『リヴァイアサン（二）』（岩波文庫）、岩波書店、2004年、172頁。 'Unwritten Lawes are all of them Lawes of Nature' —Thomas Hobbes, *Leviathan* (London: Penguin Books, 1985), p.318.
- 9) What the Mediterranean Sea was to the Greeks, breaking the bond of custom, offering new experiences, calling out new institutions and activities, that, and more, the ever retreating frontier has been to the United States directly, and to the nations of Europe more remotely. —Frederick J. Turner, *The Frontier in American History* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1962), p.38.

- 10) T.E. ヒューム著、長谷川鱒平訳『ヒュマニズムと芸術の哲学』法政大学出版局、1986年、4頁。"the principle of *continuity*" "the popular conception of evolution" —T. E. Hulme, *Speculations: Essays on Humanism and the Philosophy of Art* (London: Routledge & Kegan Paul, 1954), p.3.
- 11) 『ヒュマニズムと芸術の哲学』30頁。They[the philosophers] are moved by certain unconscious canons of satisfaction....The humanist *canons* are, I think, demonstrably false. But it is difficult to make these people realise that the canons are *false*, for they do not yet recognise that they exist. —*Speculations*, p.31.
- 12) メリル・ウィン・デイヴィズ著、藤田祐訳『ダーウィンと原理主義』岩波書店、2006年、79頁。
- 13) To be tempted to do so [express ideals of justice and right order] appears, until the very recent past, to have been a peculiarly Western proclivity. We would be wise to refrain, then, from projecting our own rights-centered views either upon those other civilizations that chose to frame their thinking about a just social order in very different ways, or, for that matter, upon the more distant reaches of the Western past to which, it seems, rights-centered moral discourse was largely alien. —Francis Oakley, *Natural Law, Laws of Nature, Natural Rights: Continuity and Discontinuity in the History of Ideas* (New York: The Continuum International Publishing Group, 2005), p.89.
- 14) 『ヒュマニズムと芸術の哲学』175頁。It was suggested that the view of the world as a mechanism was due, not to the nature of reality itself, but to certain preferences of the intellect. That the intellect in fact distorts reality. It distorts it for this reason, that in explaining things it always insists on unfolding them into parts, or analysing them. —T. E. Hulme, *Speculations*, p.183.